

付載二 天白川南岸段丘の遺跡

1

カブト山遺跡やカブト山古墳のある支丘を西の端として、東の方へ三ツ屋の支丘、斉山の独立丘陵、さらに氷上山といつて延喜式内の氷上姉子神社の裏山につづき、その東は中世末に大高城のあった丘へつらなる一連の丘陵は、ところどころ小さい侵蝕谷によつて切れているが、いわゆる天白川南岸の段丘として把握することができる。高さは30m程度の低い丘陵であり、カブト山や三ツ屋の支丘は東海市名和町に属しているが、斉山から東は名古屋市緑区の大高町の地籍である。

東海地方における氷河時代の海岸線は、渥美半島の南方約20km付近にある遠州灘の沖合にあり、伊勢湾それ自体は木曽川の河岸段丘であつたといわれる。現在の伊勢湾の海底には、約1万年前のころの地形が埋没谷としてのこつており、地下約50mの深さをみせている。

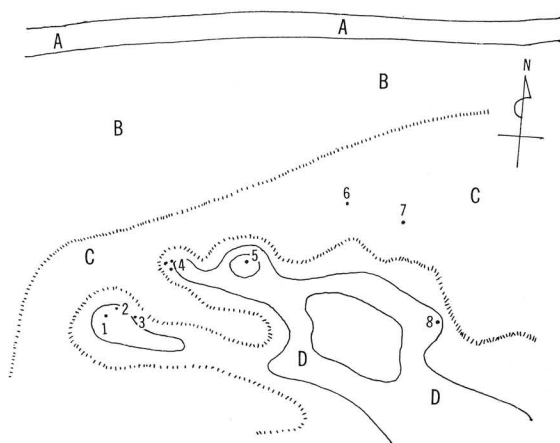
主谷である木曽川の埋没谷に対し、天白川の谷は支谷の形で流れこんでおり、規模は小さくて浅いがおなじく氷河時代の地形をあらわす埋没支谷が存在している。天白川の埋没谷の深さは、現在の河口から約1km上流である千鳥橋付近で-22m内外の深さをもっており、それから約2km下流の九号地東側の海底では-26~-27mの深度をもち、そこからさらに約4km下流にあたる名古屋港西突堤の南端付近では-29~-30mの深度があり、氷河時代における天白川下流の埋没谷の地盤勾配をうかがうことができる。(注1)

氷河時代の終末とともに海面はいちじるしく上昇してくるようになり、縄文文化早期の中葉から後葉にかけては、さらに急速な海面上昇がみられ、約4500年前と推定される縄文中期のころには現在の海面より数m高位になつている(注2)。天白川中流の名古屋市緑区鳴海町にみられる縄文早期末の上の山貝塚とか、前期の鉾の木貝塚や大根貝塚などの位置は当時の海進を示している。

いま東海市名和町から名古屋市緑区大高へ通ずる旧県道の北側にみられる約2mの落差をもつ崖面は、この時の海蝕面に比定されよう。

ここより下の面は長い年月にわたりアユチ潟といわれた地域であり、浅海底の地帯であるとともに、天白川下流の氾濫原となつていたところである。

現在の天白川南岸の地形を大観してみると、近世になつて干拓地として開拓されるまで農耕地とならなかつた旧アユチ潟と、さききのべた丘陵面、そして両者にはさまれた低位の洪積段丘面の3地域に大別することができる。そして原始・古代の時代において、生活の場を提供していたのは、低位段丘面と丘陵面である。



挿図第17 天白川南岸の地形と原始・古代遺跡

- A 天白川 B 旧アユチ潟(氾濫原) C 洪積低位段丘
D 丘陵
1. カブト山遺跡 2. カブト山古墳 3. 欠下遺跡
4. 三ツ屋古墳 5. 斉山古墳(貝塚) 6. 菩薩遺跡
7. 氷上姉子神社 8. 大高廃寺

2

カブト山から数百m東へはなれた斉山の独立丘の付近は、急な崖をなしていて、これまで土取りや樹木の伐採がさけられてきたのであるが、ここ数年の間に宅地造成がすすみ、地表面が露頭してくるとともに、小貝塚が数か所にわたり発見されてきた。なかでも斉善稲荷の境内の貝塚からは、縄文晩期終末期の土器が発見されている。天白川南岸地域における最初の住民である。(注3)

この時期につづいて斉山の小貝塚の中からも発見されている弥生土器は、カブト山遺跡からも一括資料の形で検出されてきた。この地域における第二の時期の住民であり、東海地方の弥生後期の文化で、寄道式から欠山式につづく時期であり、3世紀の後半から4世紀の初頭のころである。この時代の土地利用は、初期の水田農耕であるが、カブト山と三ツ屋の間の谷など深くきざんだ侵蝕谷の谷頭部をはじめとし、この地域にみられる規模の小さい谷には湧水地点が多く、随所に淡水の沼地がみられていて、2~3戸単位の小集落にわかれて生活がはじめられたものと考えられる。

そして丘陵の裾と旧アユチ瀧にはさまれた低位の洪積段丘面が、全面的に水田として利用されるようになるのは古墳時代に入つた4世紀の中葉以後のことである。弥生時代の農業が自然灌漑の可能な局地的な地域にかぎられているのに対し、古墳時代の農業は灌漑技術の進歩により、乾燥した土地をも農耕地として水田農耕に利用することに成功したものである。このことは弥生時代の農耕地が、現在も地表面下に黒泥土の堆積みをとめることができるような過湿地であり、特別の灌漑技術を必要としないかわりに、土地の有機分を栄養源として十分に利用できず、生産力としては低劣をまぬがれない弱さがあつた。ところが治水技術の進歩や農具の改良により、乾燥した土地を農耕地として利用できるようになると、面積の拡大とともに地力の質的な高度化が加わり、土地の生産力は飛躍的な増大があつたわけである。

遺跡の規模も必然的に大形化してくる。

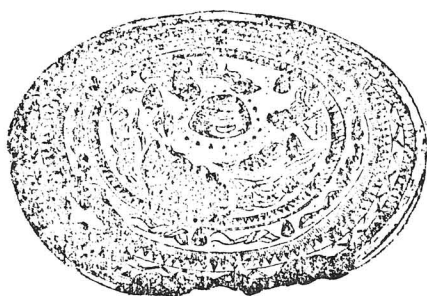
カブト山遺跡は、このころのものであるが、中央にカブト山古墳をはさんで東北の傾斜面にあたる崖錐状の地形に立地した欠下遺跡も同時期であり、古式の台付甕形土器やたくじりをはじめ、佻形をした土師器の礫などがみられる。土取り工事などで古い地表面の変化した現状では追求することはできないが、もともと欠下遺跡もカブト山遺跡群に包括されていたのではないかと推定することができる。

カブト山遺跡や欠下遺跡とはほとんど同時期と推定される遺跡が、さらに1か所、カブト山から北東へ1km近くもはなれた名古屋市緑区大高町との境界面につづいて存在している。いまだ調査されていないが菩薩遺跡と仮称されているもので、相当の広範囲にわたり土師器や須恵器の散布がみられるものであり、古い伝説にいろどられる氷上邑の中で、ヤマトタケルノミコトが滞在の夜、砂をかむ海波の音に目をさまされたという故事にちなんだ寢覚の里の碑も、遺跡の一角にたてられている。遺跡は未調査であるが4~5世紀における尾張氏の居館址の集落に推定されるものかも知れない。(注4)

3

こうした遺跡環境の中で出現したのがカブト山古墳である。4世紀の中葉のころ大和朝廷は、大和における政権が確立すると間髪を入れず、諸豪族の勢力を結集して東国の征服にのりだしてきた。大和王朝はその支配区域には行政単位としてアガタ(県)を設置したといわれ、アガタの所在は大和政権の支配下に入つたことを示す裏付けでもあつた。アガタの分布からみると尾張国は初期の大和朝廷における東の勢力限界を示している。記録にのこるアガタの東限として尾張国のニワ県(天孫本紀)やアユチ県(熱田縁起)さらに島田上下県(和名抄)などが知られている。

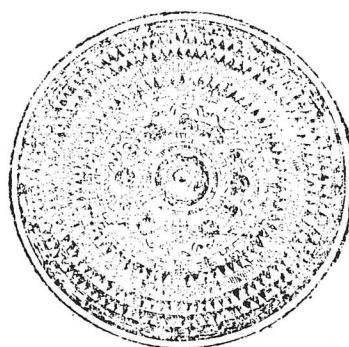
1 三神三獸鏡
直徑 七寸五分



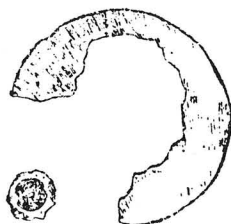
2 振形紋鏡
徑 三寸一分



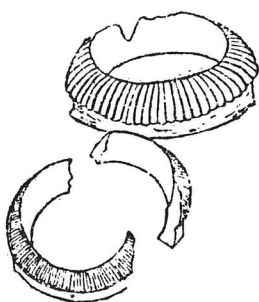
3 六神鏡
徑 五寸五分



4 古鏡破片
徑 三寸七分



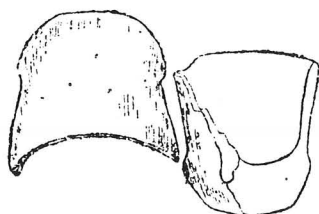
5 石 釧
内法直徑 二寸内外



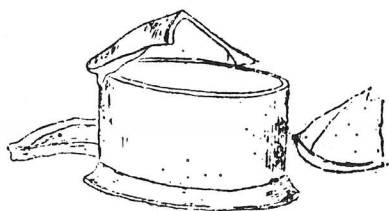
6 管 玉
徑二分二厘-長八分- 一個
徑二分 -長一寸二分- 一個
徑二分 -長一寸 - 一個
徑二分 -長 八分- 一個
徑二分 -長 四分- 一個
徑一分二厘-長 八分- 二個



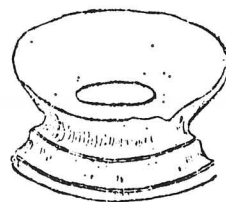
7 石 器
高、徑各約二寸六分



8 石 器
高 一寸八分、徑 三寸



9 石 器
口徑 三寸四分



挿図第18 カブト山古墳出土の遺物 (明治14年模写)

カブト山古墳は、明治13年11月20日に地主の小島松助父子によつて発掘され、粘土槨の中に朱をつめた層があり、その中に4面の鏡や管玉144個、石釧9個をはじめ、石製模造品の合子・埴・器台が発見されている。(注5)現在、東京博物館におさめられている石製模造品のほかは、三神三獣鏡・振形紋鏡・六神鏡をはじめ玉類の行方が不明で、資料としては明治14年の模写しかのこっていないのは惜しまれている。

私たちは昭和48年8月、犬山市において尾張地方で最古といわれる白山平古墳の調査事業に従事する機会をえたのであるが、竪穴式石室の下底部に割竹形の粘土床が設けてあつた。四壁とも赤色顔料が美しく塗られており、一方、粘土床の被葬者を安置した部分には特別の赤色顔料が厚く層をなしてあやしく輝いていて、その中に数々の装身具がうずめられていた。すなわち石室の東壁にそつて10面の鏡がならべられ、それから1mへだてた粘土床面には、碧玉製の鉾形石1個・車輪石1個・石釧と合子2個・鏡1面と小形の管玉190個が1群となつて検出され、その西方につづいてヒスイ製の勾玉3個・碧玉製管玉40個が発見された。11面の鏡の型式をのべると三角縁神獣鏡5面の中で、吾作銘重列二神二獣鏡・天王日月唐草文帯二神二獣鏡・唐草文帯二神二獣鏡・波文帯三神三獣鏡の4面は、中国からの舶載鏡であり、もう1面の波文帯三神三獣鏡は踏返し鏡とも考えられている。そして平縁鏡6面は、変形獣文縁方格規矩四神鏡と変形三獣鏡さらに4面の変形四獣鏡であるが、6面ともいづれも白銅の仿製鏡であつた。

前期古墳の中でも、発生期にあたる古式の古墳は、三角縁神獣鏡と若干の鉄製品のみを副葬し、玉類とか碧玉製の腕輪類をもたないものとされていることからいえば、白山平古墳の年代は4世紀後葉にくだと比定され、大和王朝の勢力が木曾川をこえて尾張国まで畿内勢力圏の中へ統一されてきた時期を示唆している。

カブト山古墳の年代は、大和朝廷の勢力が尾張国を橋頭保として、さらに東へのびようとする時期にあたり、犬山市の白山平古墳の築造につづく4世紀終末に比定されている。三神三獣鏡を出土したカブト山古墳の被葬者は、畿内勢力圏の最末端の首長として祭祀はもとより政治的支配権にぎり、さらに東方へ大和王朝が征服の軍をすすめる時には、一方の軍司令官の役割をになつたものであろう。

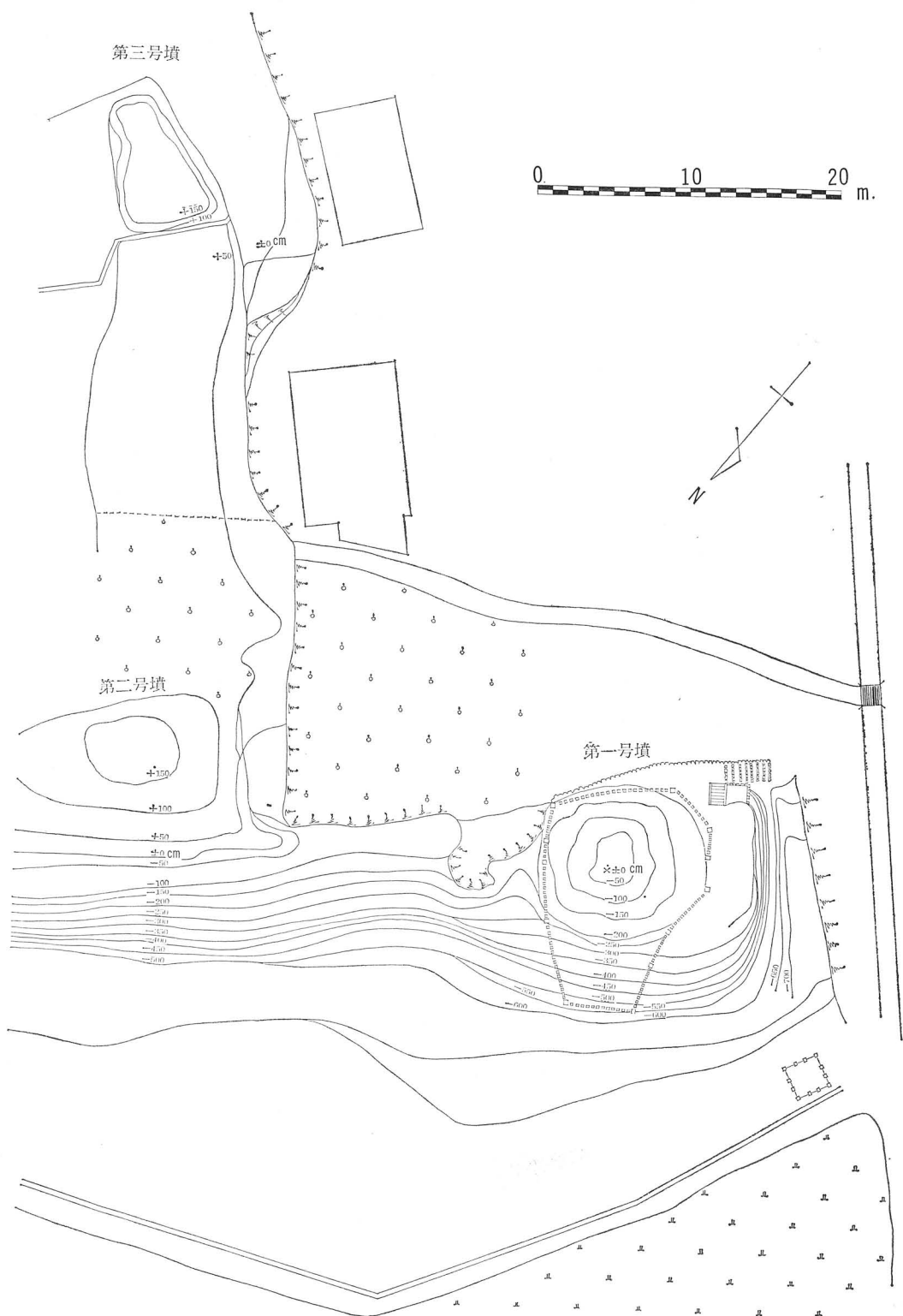
カブト山古墳をはじめ氷上姉子神社を舞台としてヤマトタケルノミコトについての伝説が著名である。ヤマトタケルは熱田神宮の祭神の一人であり、記紀には景行天皇の皇子とされ、宋書に伝えられる倭王武(雄略天皇)の上奏文にみられるように5世紀初頭のころの説話として伝えられている。

記紀のいうところによると、ヤマトタケルノミコトは景行天皇の命をうけ、大和朝廷にまつわぬ賊を平定するために東国へおもむくのであるが、尾張へ入つたミコトはカブト山古墳から近く、丘陵つづきの氷上邑にある尾張氏の居館に入り、尾張氏の娘ミヤズヒメと晴れて帰還した日には婚(メアイ)するという契りをむすび、さらに東国さして遠征の途についていつたというのである。

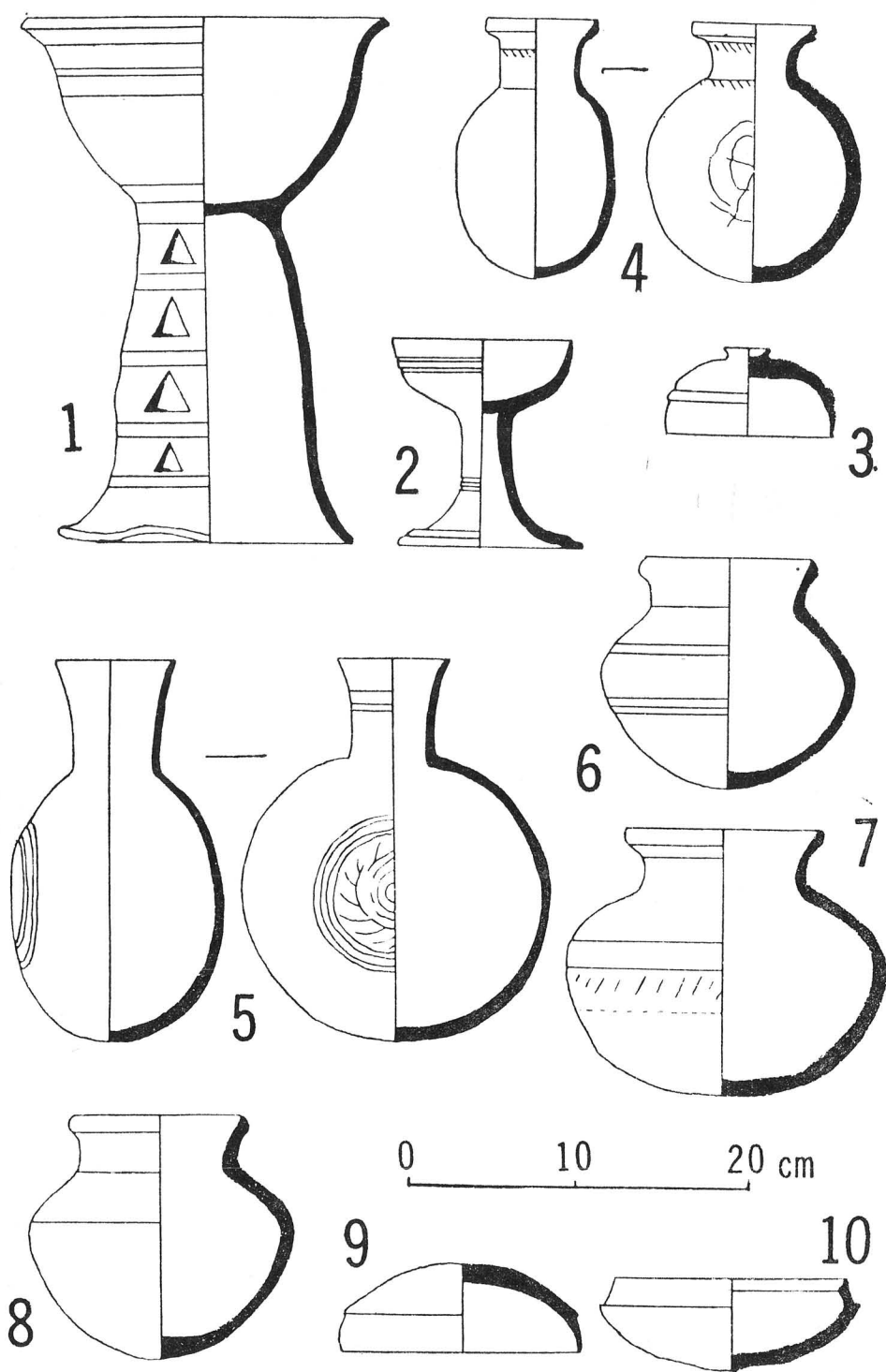
ヤマトタケルが架空の人物であり、伝説上の英雄であるということは、すでに多くの学者によつて説かれていて誰れも異存はあるまい。ヒロインとして彼と契りをむすんだミヤズヒメや、彼とともに東国さして遠征の旅にでていつた建稲種命など、ヤマトタケル伝説の一翼をになつた人々についても、実在の人物ということになると具体的な把握には困難な点が多い。ともあれ大和政権によつて幾たびもおこなわれた東国征服の大事業にあたり、数多い大和の勇者の姿を皇族將軍ヤマトタケルを主人公として形象化した大ロマンの一節として理解すべきものであろう。

尾張における尾張氏の地位は、4世紀から5世紀にかけて名古屋南部から知多半島の在地豪族が、大和政権の支配下に入つて行政される中で、次第に一族の勢力をひろげていつたものである。

名古屋台地の南端に尾張氏と関係の深い熱田神宮が鎮座し、その北につづいて断夫山古墳という



挿図第19 三ツ屋古墳群付近の地形実測図



挿図第20 三ツ屋第1号墳出土の須恵器

尾張地方で最大の前方後円墳をつくっており、周囲にめぐらしているハニワは須恵質のものがみられていて、5世紀の終末か6世紀初頭に年代が比定されている。尾張における尾張氏の政治的地位は、祭祀権とともに5世紀の後半には確立し、すでにそのころ尾張氏の本貫の地は、氷上邑をはなれて名古屋台地の熱田へうつつていたものであろう。

記紀にいう尾張氏の伝承には創作が多い。6世紀中葉のころ尾張氏は継体天皇に妃をおくり、安閑・宣化の両天皇の外戚となり、在地豪族としては破格の栄進をしてからのち、おのが氏族の沿革を古く誇示するために、意図的に創作した部分が多く入っている。ヤマトタケルの伝説についても架空であり、年代も固有名詞も具体性に欠ける点が多いのであるが、ミヤズヒメの兄といわれ、ヤマトタケルの遠征に参加し、長い戦争の旅にたおれ、ついに帰還できなかつたとされる建稲種命など、古代首長の性格の一面を物語るものであろう。

4

三ツ屋古墳の東方にあたり、一段と高い丘が斉山であるが、頂上に近く古墳が指摘されている。現状からは円墳のようであるが、西方につづいて土取りされた部分が方形に延びていた状態がうかがわれ、前方後円墳であつたと推定されている。もう一つ貴重なことは古墳の周辺から土師質の埴輪が検出されていることである（注6）。知多半島では埴輪をもつた古墳は1基も知られていない。古墳がわずかに存在したことをうかがい知るほどしか遺存していないことは遺憾である。

三ツ屋古墳については、いわゆる後期の群集墳であり、第一号墳から出土した須恵器は尾張地方という第三型式に比定され、年代も6世紀にもとめられている。

カブト山古墳で代表される前期古墳のように、名古屋南部とかアユチ県（アガタ）一円といった広い範囲を統一して、大和朝廷に対しては橋頭保の役目をはたし、事あればみずから支配下の農民をひきいて、大和勢力の先頭に立つという豪族とはことなり、三ツ屋古墳のような後期の群集墳の場合は、古墳周辺の水田地域を支配した地方豪族の墳墓であり、治山治水をはじめ地方の米生産を督励した農業開拓者の姿をうかがうのである。第三号墳をタワケ塚と称しているのも、初期の米作水田を切りひらいた人、すなわち田分（タワケ）を意味したものかも知れない。（注7）

やがて7世紀から8世紀になると、おなじく丘陵つづきの氷上姉子神社の東で、大高小学校の付近から北へ舌状にはりだした台地の上に、古代寺院の大高廃寺が建立されている。平行する4条の沈線がかざられた重弧文の軒平瓦や、中房に圈円をそなえた蓮子を9個もつ16弁の蓮華文軒丸瓦が採集されている。単弁蓮華文軒丸瓦の中房蓮子が圈円をそなえていることや、周縁が重圈であることは白鳳時代の様式であり、さらに重圈に鋸歯文を加えていることは白鳳末期も奈良時代に近いものである。（注8）

（杉崎 章）

注

1. 井関弘太郎・幸島莊八郎「名古屋港付近における沖積層下底面の地形」地理学評論第32巻第9号所収・1959年
2. 井関弘太郎「縄文早期ごろの海面とその相対的变化」名古屋大学文学部研究論集17所収・1957年
3. 増子康真「知多郡大高町斉山の貝塚群」野帳第10冊所収・1962年
4. 池田陸介「東海市名和町の遺跡」東海市文化財調査委員報告書所収・1973年
5. 小栗鉄次郎「上野町名和に於ける古墳」愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第八所収・1930年

6. 前掲「注4」

7. 前掲「注5」

大矢利久・加古栄・森本良三・坂野一幸「名和古墳群随考」知多郡上野中学校・1954年

杉崎章「愛知県知多郡上野町三ツ屋古墳の子持勾玉について」考古学雑誌42の3所収・1954年

8. 芳賀陽「尾張国知多郡大高町発見の古瓦について」野帳第7冊所収・1958年